

ヨーロッパ一九三〇年代論・エピローグ

平瀬徹也

本日の講義をもって、「ヨーロッパ一九三〇年代論」と題した今年度の特殊講義は終了することになります。御大層な題目を掲げながら、実際には「ヨーロッパ一九三〇年代論入門」に近いものになつたのではないかと内心忸怩たるものがありますが、大学に『授業案内』原稿を提出した一昨年冬の時点ではどんな内容になるか予見することができなかつたということでお許しいただく他ありません。また、私の本来の専門分野ではない日常生活史や大衆文化なども大いに論じたいとの当初の願望も、やはり付焼刃は続かないと申しますか、中途半端なもの、一応の言及程度に終わつてしまつたのではないかと反省しております。それでも一年は過ぎ、一応の総括を試みる日が来てしました。

—

この講義の最初に私は、「宣伝は一九三〇年代に人びとが呼吸した空気の一部となつた」とのピアーズ・ブレンドンの近著⁽¹⁾の言葉にも示唆を得て、一九三〇年代のヨーロッパ、ひろく言って二十世紀のヨーロッパを、「イデオロギー（過剰）の時代」と特徴づけました。その程度のことを言うのに何も他人の助けを借りることは無かつたのですが、話のきつかけとしてブレンドンを利用させてもらいました。

言う迄もなく、歴史上のどんな時代にも、その時代に特有のイデオロギーは存在しました。例えば、絶対王政の時代に「王権神授説」や「暴君放伐論」が存在したように、どの時代にも体制側の自己正当化のイデオロギーとそれを批判する対抗イデオロギーが存在したでしょう。それら無くしては体制も体制を否定する運動も長期にわたつて自己

を維持することは困難でしょう。二十世紀もその例外ではなく、民主主義、共産主義、社会民主主義、ファシズム、イスラム主義などのイデオロギーがいわば「世直しの思想」として競つて自己の正当性を主張してきました。

しかし、二十世紀、なかでも一九三〇年代ほど諸イデオロギーが大衆や知識人の支持を求めて競い合い、また影響力を保持した時代は無かつたのではないかと、多少の我田引水はあるかとは思いますが、私は考えております。

これを逆に言えば、大衆や知識人の側もそれらのイデオロギーの何れかの有効性を心から信じ、その確信に従つて行動したということです。脱イデオロギーの時代といわれる世紀転換期の現在と比較してそうだつたというだけではありません。未だイデオロギー対立が甚だしかった時代、たとえば一九五〇年代、六〇年代に惹起したベトナム戦争を一九三〇年代のスペイン内戦と比較すればそれは明らかです。ベトナム戦争は強大とはとても言えないベトナム民族が大国のフランスついでアメリカ合衆国を相手に民族の独立と統一を旗印に戦つた戦争ということで、世界の注目を——おそらくは同情も——集めながら戦われました。その点では列強の干渉に苦しめられつつ反ファシズムを旗印として戦われたスペイン内戦と外的状況はよく似ております。

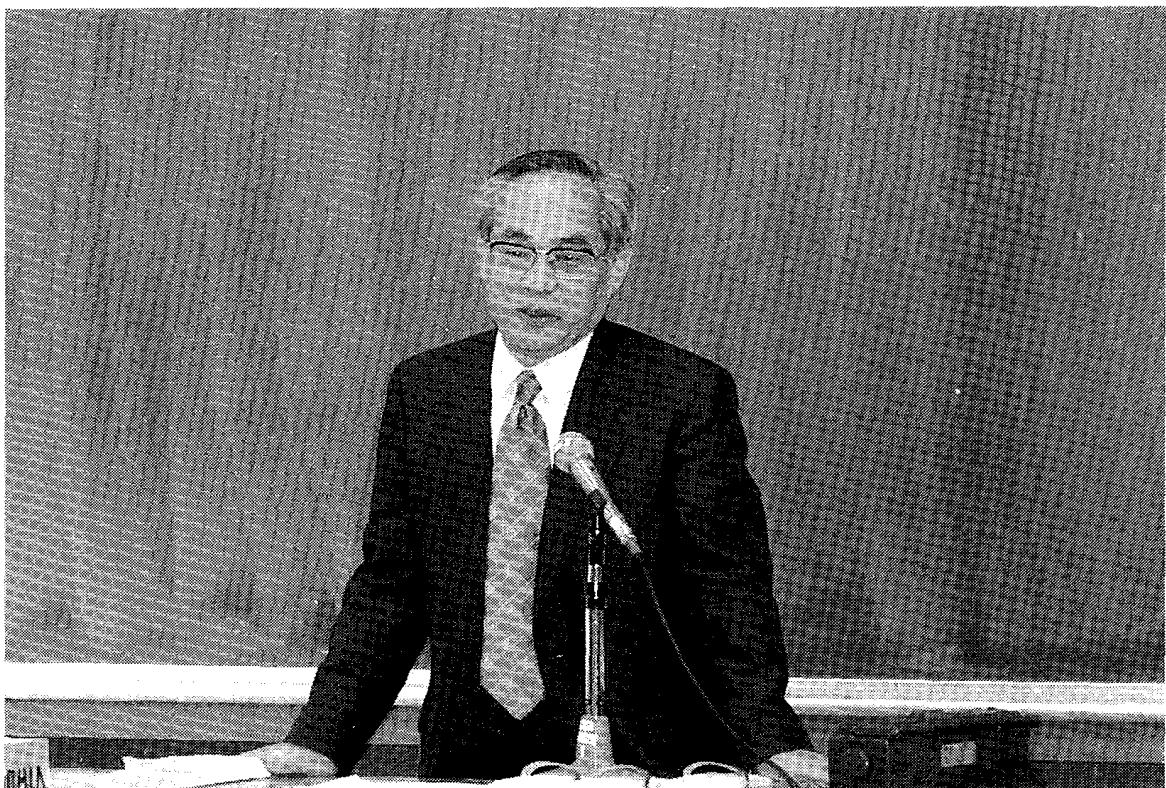
しかし、ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』やマルローの『希望』やオーラウエルの『カタロニア讃歌』を例にひくまでもなく、欧米各国から自らの信条に従つた自発的な義勇兵が多数参加し——その一部である「国際旅団」はマドリード攻防戦で大きな役割を果たした——スペイン内戦と比較して、ベトナム戦争では各国でベトナム支援の反戦運動はあつたにせよ、また共産圏諸国からの武器援助や後方支援部隊の大量派遣（たとえば中国）があつたにせよ、諸外国からの自発的な義勇兵の大量参加はほとんど見られませんでした。これには北ベトナム政府の意向もあつたのかも知れませんが、それだけが原因とも思われません。やはり「時代の差」といったものをそこに感ぜざるを得ません。一九六〇年代にボリビアのゲリラに身を投じたチエ・ゲバラの孤独な死は一つの時代の終りを象徴しています。

私は最近、テレビ放映でイギリスのケン・ローチ監督の映画作品『大地と自由』を見て、深い感慨を禁じえませんでした。御覧になつた方には余計ですが、多分そういう方は少ないと勝手に推測するので粗筋の粗筋を申しますと、イギリス共産黨の末端の党員らしい主人公は、スペイン内戦についての講演会でのスペイン共和派支援の訴えに心を動かされ、国際義勇軍の一員としてスペインの乾いた大地に赴きます（たしか本人は失業中だったと記憶します。当

時の義勇兵に失業者が少なくなかったのは事実ですが、生命を賭けた戦争志願でそれが主要な動機であつたとは考えられません。戦場での彼らの勇猛ぶりが何よりの証拠でしょう）。現地での戦闘は当然ながら苛烈なものでした。主人公を当惑させたのはそのことではなく、むしろ共和政府側の内紛であり、とりわけ共産党系の武装勢力とアナーキスト系やトロツキー派の武装勢力との間の武力抗争、いわゆる「内戦の中の内戦」（斎藤孝）でした。そうした対立抗争にはそれぞれの側の自己正当化の論理がありました。一方で、ファシズムと闘うスペイン人民を助けるという純粹な動機から参加した義勇兵たちにとっては耐えられない苦痛であり、不条理そのものでした。こうして主人公は深い幻滅を中心にして帰国します。以上の主人公の軌跡はトロツキー派の武装勢力に一兵士として参加したオーヴェルの軌跡そのものと言つてよいほど似ていますが、知識人のオーヴェルが帰国後、「カタロニア讃歌」を著してこの不条理を天下に告発した——それはそれで立派ですが——のに対し、ケン・ローチの描く無告の民である主人公は、世間にも家族にさえも何を訴えるでもなく、余生をひつそりと市井の人として過ごします。かれの死後孫娘が主人公の遺品を整理して初めてかれのスペイン内戦との関わりが明らかとなるのであり、ローチ監督は作品の中で何れかの陣営やそのイデオロギーを一方的に代弁するのではなく、義勇兵時代の記憶を誰に語ることなく、しかし、当時の新聞や思い出の品などを大切に保存しながら死んだ主人公を語ることで、静かにこの不条理を告発しています。

オーヴェルにはオーヴェルの立場、知識人の責任という立場があり、主人公には沈黙せざるを得ない事情もあつたのでしようが、また諸党派にもそれぞれの論理があつたわけで、ローチ監督が何れかの党派の主張を支持することよりも、主人公の軌跡を淡々と描くことを選んだのも、この不条理を一党派の責任に帰することの虚しさを知っているからと思われます。ローチは作品の中で内戦のもう一方の当事者であるフランコ将軍側に全く目を向けていません。それはフランコ側を免責したいためでは勿論ないでしょう。あえて私の独断を述べれば、かれはスペイン人全体を「イデオロギーの時代」の犠牲者として描きたかったのではないかと思います。この私の独断が正しいか否かは別にしても、映画『誰がために鐘は鳴る』におけるスペイン政府側をひたすら美化した描き方との違いには驚かされます。二十世紀末の映画では一九三〇年代のイノセンス、天真爛漫さは不可能であるし、許されもしないということでしょうか。

ちなみに、私はこれまでスペインを二度訪れました。一度目は今から二十年ほど前で、フランコ統領こそ死んでいました。



ましたが、旧フランコ派の政権は未だ命脈を保っていました。その時、内戦時のフランコ側の伝説的勇戦の地、古都トレドのアルカサール（城塞）を訪れました。多くの観光客でにぎわう城内の各所にはフランコ側の籠城軍の勇戦や功績を一方的に礼賛する写真やその説明文——スペイン語や英語は無論のこと、戦前とおぼしき日本語のものもありました——が展示されていましたのは勿論です。

ところで、それから数年後の二度目のスペイン訪問の時には社会労働党のゴンサレスがすでに安定した政権を維持しており、トレドの戦跡の説明文もおそらく書き変えられているものと想像していました。しかし、実際にはアルカサールの写真にも説明文にも何の変更もなく、フランコ軍礼賛の一方的記述を再度読むことになりました。これは意外ではありました。理解できることになりました。説明文を書き直すとなれば、内戦とその中での両陣営の位置づけ、評価は避けられないでしょう。当時、社会労働党政権は安定していましたが、内戦の評価、その見直しが提起されれば、旧フランコ政権側が黙つている筈もなく、国内は蜂の巣をつついたようになり、再生したばかりのスペイン民主主義はその強くない土台をゆさぶられるでしょう。内戦における敗者である旧共和政府派からの名誉回復の要求が無い筈はないのに、ゴンサレス政権があえてそれに着手しないのは、過去の真実の追求がどれほど正当な要求であっても、それにより過去のイデオロギー的対立を再燃させて現在の民主主義の安

定を害することは得策ではないとの認識に立つからでしょう。過去の真相の追求は当然の要求であるとしても、それには一定の時間の隔たりとそれによる情熱の沈静化——とりわけ情熱的なスペイン人にとっては——が必要であり、「イデオロギーの時代」への逆戻りだけは避けたいということでしょう。私にはスペイン内戦の夥しい犠牲がようやく政治的英知として生かされたと感じられます。今、トレドを訪れたら戦跡の写真と説明文はどうなっているでしょうか。最近の訪問者に聞きたいところです。

二

閑話休題。「イデオロギーの時代」のもつとも顯著な例としてスペイン内戦を真っ先に挙げましたが、一九三〇年代はそうした事例にこと欠きません。ソ連共産主義への西ヨーロッパ知識人の対応の変遷もそうした事例の一つでしょう。

そもそも共産主義や社会主義への西ヨーロッパ人の思い入れは、周知の通り古くはカンパネルラの『太陽の都』やトマス・モアの『ユートピア』にまで遡る根深いもので、平等への人類の正当な希求に基づくものでありました。そして十九世紀に産業革命の影響下にそれが多数の知識人の手によって、より近代的、唯物主義的となつた後でさえ、人類の究極的理想、倫理的要請としての性格を全く失うということはありませんでした。したがつて一九一七年のロシア十月革命は単に列強中の一国における変革というにとどまらず、人類の多年の夢の実現として多くの人びとに熱烈に歓迎されました。そしてボリシェヴィキによるロマノフ王家の人びとの処刑やメンシェヴィキら政敵への苛酷な処遇が知られた後でさえ、それらをいつときの逸脱、苛烈な状況に強いられた不可避の対応と見なしがちでした。ボリシェヴィキ政権の側に幾多の問題があるとしてもそれに対する列強の武力干渉は、誕生したばかりの人類の理想を圧殺するものとして常に西側諸国民の相当部分の激しい拒否反応を生んだことはその証左と申せましよう。

こうした思想的状況は一九三〇年代初めまでに多少の変化を被りました。モスクワの指示する共産主義が西欧知識人が多年脳裏に描いてきたような、民主主義と共存しむしろその完成であるような共産主義ではなく、異なる思想の持主の徹底的排除をめざす極めて排他的一枚岩的なそれであることが、各国共産党のとる政策や党内闘争の苛烈さを通じてあらわになり、大衆や知識人の失望や離反を招きました。フランスを例にとれば、大戦前の社会党が一九二〇

年に社共二党に分裂したとき、新しく生まれた共産党は旧社会党内の多数派であり、それ故に機関紙『ユマニテ』や党の資産を引き継いだにも拘わらず、一九三二年春までには社共の勢力比は全く逆転し、共産党的支持層は一部の労働組合や知識人に限定されたものとなっていました。

ソ連共産主義のそうした閉塞状況を一変させたのが、一九二九年に始まる世界恐慌の大波でした。破局的としか評し様の無い経済的苦境、そのバロメーターとも言うべき巨大な失業者の群れの出現を前にして自由主義経済への信頼は文字通り地に墜ち、それに逆比例して共産主義に代表される計画経済の評価はいやが上にも高まりました。ソ連国内の苦しい実状はソ連政府の秘密主義により西側のソ連視察者にさえ隠された結果、ソ連共産主義の多年の批判者であつたあのフェビアン社会主義者のウェーブ夫妻がソ連視察旅行の後に著したソ連共産主義論に「新しき文明」との副題を付けた事実が、変化した思想状況を何よりも雄弁に示しています。

フランスでは、「計画^{プラン}」や「国家改造^{レ・オルム・デタ}」といった言葉が左翼、保守派を問わず流行語となり、こうした潮流は、一度は低下した共産党の面目と威信を回復させました。資本主義の牙城ともいすべきアメリカ合衆国でさえ革命の可能性が真剣に恐れられる状況の中でソ連共産主義は再び西欧知識人のいわば希望の星と見なされるに至ります⁽²⁾。共産党が取るに足らない勢力であつたイギリスで、共産主義への共感が知識人の間で流行にさえなりました⁽³⁾。

しかし、こうした西欧知識人の舞い上がりは長くは続きませんでした。あるいは、スターリンにより地上に引きずりおろされたと言うべきでしょう。一九三〇年代前半にはスターリン独裁の下で善かれ惡しかれ安定して経済建設に邁進しているかに見え、そのために西側諸国との協調外交すら目ざしたソ連政治も大肅清という形で再び激動期を迎えました。その原因については今日でも論争に決着がついているとは言えないようですが、スターリン個人の病的猜疑心がそこで大きな役割を演じたことだけは否定できないでしょう。

ソ連全体の利益からすれば、日本とドイツ、とりわけ後者の増大する脅威に対処するためには外交的には国内政治の安定ぶりを誇示して潜在的同盟国たる西側大国（英米仏）の信用を博する必要があり、内政的にも混乱を避けて経済建設——国防に直結する——をさらに推進することは最優先課題であった筈です。国民の団結を乱すことなどどの観点からしても得策ではありませんでした。しかし、スターリンは社会主義建設が前進すればするほど国内の階級闘争が激化するとの独善的理論を考案し、一九三六年から、かつて同志であつたソ連共産党幹部や赤軍幹部たちに対する

大規模な粛清を開始しました。戦後のわが国では、こうした粛清は大変遺憾で悲しむべきことではあったが、それにより潜在的裏切者（ナチス・ドイツへの内通者、いわゆる第五列）を予防的に除去したことと対独戦に際して全力で侵略に抵抗することができ、結局は西側諸国の利益にもなつたとの解釈もよく聞かれました。しかし、こうした弁護論はあまりに不自然で、今日ではそれを護持する人はあまり多くないでしょう。

何よりも大粛清がもたらしたソ連の政治経済軍事の混乱を軽視すべきではないでしょう。とりわけ直接国防に携わるソ連軍への粛清の影響は真に憂うべきものでした。第二次世界大戦中にドイツ軍の捕虜となつた大量のソ連軍将兵の間からスターリンのソ連と戦う「ウラソフ軍」と呼ばれる約五万の軍団が組織され、ドイツ国防軍と肩を並べて祖国に弓を引いた事実は、ソ連軍将兵の置かれた混乱、困惑をよく物語るものです。ドイツ人や日本人の捕虜たちの間でこうした軍団規模の自國政権への反乱軍が組織されたとは寡聞にして聞きません。

しかし、ある意味ではそれに劣らず重要でありながら、わが国で充分に論及されて来なかつた側面はスターリンの大粛清が西側諸国との外交に及ぼした否定的影响でしょう。西側大国のナチス・ドイツに対する「宥和政策」において粛清によるソ連軍事力の弱体化——それが事実であれ、想像上のものであれ——への不信が一因となつたことは否めないとこです。だが、それ以上に有害であつたのはスターリン体制下のソ連に対して西側諸国の抱いた道義的嫌悪でしょう。昨日までのソ連の政治・軍事の最高幹部たちがそろいもそろつて敵対国の手先であつたことを告白して死刑となるなどということが狂信的ソ連信奉者以外に受け容れられる筈がありません。それはいたずらにソ連指導部に対する、さらにはソ連体制そのものに対する道義的嫌悪をもよおさせるだけでした。反ファシズムの同志だ、ヒトラー・ドイツと鬭う同盟国だといふにソ連側で自国を売り込んで、ソ連体制がナチス体制よりもであるとは西側諸国の指導者たちには、にわかに判断できないほど大粛清はソ連国家に道徳的打撃を与えました。ソ連の御用学者は勿論、ソ連共産主義の眞面目な弁護論者たちはのちに「社会主義の祖国」ソ連に対する資本主義諸国の支配層の「反ソ意識」が西側大国の宥和政策の根元にあつたと主張しました。それは誤りではありませんが、それに劣らず重要なことはその反ソ意識の原因なのであって、西側指導者たちのスターリン体制に対する道義的不信、嫌悪感を考慮に入れない限り、宥和政策の充分な説明とはならないでしょう。この不信のある限り、ソ連の提唱する反ファシズムは口実に過ぎず、ドイツと西側諸国との不和が眞のねらいだと西側の疑念を払拭することは困難でした。また、この

疑念はおそらく根拠のあるものでした。

さらに、スターリン政権下の大肃清と相まって西側諸国の指導者たちのみならず世論一般の対ソ不信感を決定的にし、共産主義イデオロギーへの打撃となつたのは、既にたびたび指摘されてきたようの一九三九年八月の独ソ不可侵条約の締結です。反ファシズムを呼号するばかりか、西側大国が充分に反ファシズム的でないと各国共産党に自国政府を厳しく批判させてきたソ連が、当のファシズム大国ドイツとほとんど同盟国にも等しい関係に入る条約（と秘密議定書）を結んだとあれば、共産主義イデオロギーへの深い幻滅が生じたのは避け難いことでした。

私は、国家としてのソ連が自国の生存を賭した外交戦において、より危険な敵ナチス・ドイツとの同盟により自国の当面の安全を計つたこと自体をそれほど非道義的であつたとも、近視眼的であつたとも考えません。国家にとって自国の滅亡の回避は何にもまして優先さるべき目標でしそう。その点では西欧諸国とて本質的な違いはないでしそう。しかし、それまでのソ連の反ファシズム路線が声高で印象的であったが故に、とりわけ左翼陣営に失望や幻滅が生じるのは避けられませんでした。だが、それ以上に深刻な問題は独ソ条約締結以後のスターリンの言動でした。

諸外国の共産党はこれ迄の主張を百パーセント覆して独ソ不可侵条約をヨーロッパ平和への第一歩と宣伝することを強いられました。ソ連国家にとつての不可避の選択としてではなく、平和への積極的貢献だと主張した——させられた——のです。それが欺瞞であるこ



とはスター・リンにとつて何ら良心を痛めるものではありませんでした。リッベントロープ独外相との不可侵条約交渉の席でスター・リンは、独ソの接近を阻止できなかつた西側大国の指導者たちの無能ぶりを嘲笑してみせました。さらに条約成立を祝したパーティでスター・リンは、「わたしはドイツ国民がどれほど總統を愛しているか知っています。だからこそわたしは總統の健康を祈つて乾杯をしたいのです⁽⁴⁾」と、ヒトラーのための乾杯の音頭をとりました。ソ連指導者としてソ連国家の安全確保を優先したことは許されるとしても、ここまでナチス・ドイツに卑屈に迎合することができるとは驚きであり、スター・リンの道義的資質の低さ、人物の卑小さを如実に語っています。これが十九世紀初めのデカブリスト運動以来の百余年間のロシアの革命運動の夥しい犠牲と献身の最終的結末でした。われわれはこの事実の重さから決して顔を背けてはならないでしよう⁽⁵⁾。

三

独ソ不可侵条約の締結は西欧の知識人にとっては、「イデオロギーの時代」の終りの始まりであつたと言つてよいでしょう。信頼が低下したのは共産主義イデオロギーだけではありません。ナチス・イデオロギーもまた、その最大の売り物であつた反共産主義を引つこめて共産主義の母国と手を結ぶことにより、そのシニカルで機会主義的な性格を世界に示しました。ヒトラーの脳裏にあるのはただドイツ人の利害、せいぜい「アーリア人」の利害でしかないことが明らかになりました。ヒトラーの発言をそれ迄文字通りに受け取つていた極東の日本では「歐州の情勢は複雑怪奇」との声明を残して内閣が退陣しました。やがて成立する日独伊の同盟が徹底して自國本位のものとなることをこの事件は予告していました。ここでもイデオロギーよりも現実的国家利益が重視されることが明らかになりました。

それでは西側大国が掲げた民主主義イデオロギーの場合はどうだつたでしょうか。そもそもヨーロッパを発祥の地とする民主主義理念が古代ギリシアの昔から非ヨーロッパ人をどこまで適用範囲に含めていたかについては単なる疑問以上のものがありましたし、アジア、アフリカ、ラテンニアmericaにおける（穩やかに言つても）自國本位の植民地支配、アメリカ大陸における黒人奴隸制や先住民への非人間的処遇など、民主主義が非ヨーロッパ人にも適用された例を探す方が骨が折れるというのが実状でした。それらは一九三〇年代に大きな変容を被つていてはどうか。この疑問にも否定的に答えざるを得ません。第一次大戦中から戦後にかけて民族自決のスローガンは強く叫ばれました

が、それによつてアジア・アフリカの植民地が母国から独立を認められた例は皆無に近いといつても過言ではあります。

私はこれらの植民地で民主主義への歩みが全く見られなかつたと言うつもりはありません。植民地住民の抵抗にも促されて非ヨーロッパ系住民の権利状況は——とりわけ地方自治の承認という形で——改善される方向にはありますでした。しかし、その歩みは遅々としており、むしろ民主主義イデオロギーの内実に疑問を抱かせる程度のものに過ぎませんでした。のち、第二次世界大戦に際して、ヨーロッパ植民地主義への抵抗のためには日本、ドイツなど枢軸諸国と手を結ぶ動きがアジアの各地に見られた事実も、それが性急さに基づく誤りであつたことは明らかであるにせよ、それまでのあまりに遅い非植民地化と無関係でないことは言う迄もないでしょう。民主主義擁護をスローガンに戦われた第二次大戦の後でさえ、アジア・アフリカ諸国の独立への歩みはしばしば血塗られたものでした。

しかし、一九三〇年代の植民地問題をめぐる状況に敢えて前代との違いを見出すとすれば、植民地住民の無権利状態に関して未だ不充分だつたとはいえ、その実情が報道されるようになり、改善への希望が抱かれていたことでしょう。この希望は、一九三六—七年のフランス人民戦線政府の植民地改革の失敗した企てがそうであつたように、現地ヨーロッパ人の既成利益の壁を突き崩すほどに強力ではなかつたとはいえ、植民地住民の無権利を当然と考える議論が旗色が悪くなりつつあつたことは事実です。そして、こうした状況をもたらすに当たつて国際共産主義運動が小さくない役割を果たしたことは率直に認めるべきでしょう。ソ連国内での人権無視状況がどれほどファシズム諸国そのそれに近く、ときにはむしろそれを凌駕していた——私はそう考えます——としても、共産主義イデオロギーはファシズムのように人種の平等や人権の普遍性をそのものとして否定していたわけではありませんでした。したがつてヨーロッパでは独ソ不可侵条約以降、とりわけ知識人の間に共産主義への不信が広がつたとしても、植民地従属国においては未だそのイデオロギー的魅力は衰えなかつたし、それまで共産主義運動が抑圧されてきた日本でも同様でした。

その意味では一九三〇年代末には一方のヨーロッパ諸国と他方の植民地従属国や日本との間に思想状況に明らかな温度差が生じたと言うべきでしよう。満鉄、南満州鉄道株式会社といえば誰でも知つてているようにいわば日本帝国主義の植民地経営の先兵でありました。しかし、草柳大蔵氏の『実録満鉄調査部』によれば、一九四二年当時、同社の上海事務所で社員仲間の送別会が開かれた際、会は飲むほどに酔うほどに乱れ、最後は「インター・ナショナル」の合唱

でお開きになつたとのことです。労働者階級の国際的連帶を訴えるあの「インターナショナル」をです。当時の日本 のインテリゲンツィアをどれほどマルクス主義が捉えていたかを実によく示すエピソードではあります。

四

一九三〇年代に対する「イデオロギーの時代」との性格付けについてはこの辺で止めておきます。この時代はまた ヨーロッパにおいては大衆消費の時代、大衆文化の時代の始まりでもありました。ラジオ、レコード、トーキー映画、 自家用自動車、民間航空など一九三〇年代に大衆にアクセス可能となりつつあった商品や技術、それらに支えられた ポピュラー・ミュージックや放送番組を始めとする大衆娯楽や大衆文化も一九三〇年代を語るとき逸することはでき ません。しかし、それらについては個々にこれ迄の講義で不充分ながら言及してきたので、くりかえしは避け⁽⁶⁾ここで はその社会的影響、これらの新商品や新技術が社会をどう変容させたかに手短かに言及したいと思います。

ひとことで言うとすれば、それらの商品や技術の普及によりヨーロッパ諸国はいわゆる「大衆社会化」の波に洗わ れたと言えるでしょう。その点ではファシズム諸国も「民主国家」イギリスやフランスと相似た変化を経験しました。こ れ迄は一般大衆に無縁であった商品や娯楽が大衆に享受されるためには、単にフォード・システムといった大量生産 方式が工業に導入される必要があつただけでなく、宣伝やマーケティングといった大衆の欲望をかき立てるソフト 技術も必要とされました。換言すれば、大衆は企業やときには政党や政府により操作される対象となりました。ラジ オの普及なしにヒトラーの政権獲得があり得たか否かは軽々に判断できませんが、F·D·ローズヴェルト米大統領 の「炉辺談話」の放送と同様にヒトラーのラジオ演説が大衆の強い関心を呼んだことは何よりも否定できないでしょ う。ナチスの党大会は天空を照らす探照灯の光の列柱によりいやが上にも興奮をかき立てられました。航空機の利用 はヒトラーの遊説旅行を大いに助けました。

見るスポーツの隆盛はオリンピック競技においてこの時代その頂点に達しました。たとえ一九三六年のベルリン大 会が聖火リレーや選手村といった新機軸とともに徹底的にナチスによりドイツの国威発揚に利用されたとしても、競 技に死力を尽くした選手たち、ジェシー・オーウエンスや前畠秀子の与えた感動は本物でした。ちなみに、前畠はベ ルリンで金メダルがとれなければ生きて帰国することは考えていなかつたと後年語っています。当時の日本のナショ

ナリズム・イデオロギーの強大さを示す痛ましい事実がありました。

全体主義諸国では大衆は主として政府や政党のイデオロギー操作の対象となり、西側諸国では大衆は主として企業の欲望操作の対象となつたとの違いはありましたが、その違いは必ずしも大きいものではありませんでした。政治体制を問わず、ヨーロッパ中で自動車レースが大衆の熱狂の対象となりました。他のヨーロッパ諸国の大衆と同じくナチス・ドイツの国民も、ヒトラーの約束した「国民車」を入手する夢に心をおどらせました。ヒトラーといえども大衆に夢を持たせることで、その支持を一層確実にしたいと考えました。一斉の有給休暇制度の導入により国民の支持を得ようとした点でも、ドイツやイタリアとフランスは同じ道を歩みました。（むしろフランスがドイツやイタリアに学びました）。一九三八年秋のミュンヘン協定に先立つズデーテン危機に際してドイツ国民に愛国的好戦的熱狂が全く見られなかつたとき、ヒトラーは深い失望を味わい、秘かにドイツ国民をののしりました。長年にわたるナチスの国粹主義宣伝にも拘わらず、大戦の脅威に対するドイツ国民の反応とイギリス・フランス両国民の反応の間に何ほどの違いもありませんでした。大衆社会化の趨勢の下では国民の関心は公共の事柄よりも私的領域に向かいがちです。そうした状況の下ではヒトラーにとつて戦争は国民に強制するしか道はありませんでした。強制が可能であった点がドイツと西側諸国との違いでした。結果においてそれは大きな違いでしたが。

一九三〇年代を生きた人たちがしだいに数少くなりつつある現在、一九三〇年代を振り返ることの意義は何なのでしょうか。それがわれわれの通つてきた道だからというのももちろん立派な答えでしょう。今日の大衆消費社会の原点がそこにあつたというのも一応の答えでしょう。それに比べて、脱イデオロギーの時代といわれる現在、イデオロギーにときとして心身を捧げた時代はもはや完全に過去のものとなつたとの受け取り方もあるでしょう。

しかし、本当に過去のものとなつたと言いかれるのかどうか。イデオロギーの悪靈は必ずしも常に過去と同じ名前で迫つてくるわけではないでしょう。人類の貴重な文化遺産の破壊も意に介さない宗教的非寛容や排他的民族主義は今でも世界の各地で猛威をふるっています。（その意味では地域によるイデオロギーの温度差は無くなっています。私は日本が将来そうした悪靈にとり憑かれるとは予想していません（絶対にそうならないと言い切る自信はありませんが）。むしろ、こうした悪靈にとり憑かれた国への正しい対処ができるか否かが、これから問われる事態であろうと

考へています。そうした私の判断が正しひとすれば、同じ課題に直面した一九三〇年代の西ヨーロッパ諸国の経験は決して他人事ではないと考えています。

註

- (1) Piers Brendon, *The Dark Valley; A Panorama of the 1930s*, (London,2000), Preface, XVI.
- (2) 当時アメリカで「ソ連からの熟練労働者六〇〇〇人の求人に一〇万人の応募者が殺到した」事実には今昔の感を禁じえない。D・A・シャノン編『大恐慌』、中公新書、一九六三年、三一六頁。
- (3) カトリック作家のグレアム・グリーンすら一九三四年に次のように書いた。「次の数年間、この国にどんな政治的変化が来るか知らないが、一つの事だけは間違いなくほとんど確実だ。それは階級の差別が不变のままでいる」とはい、そして今日存在しているようなパブリック・スクールは消え去るだらうということだ。」J・サイモンズ『一九三〇年代』、日本文献センター出版部、一九六七年、五三頁。
- (4) アラン・バロック『アドルフ・ヒトラー』I・II、みずづ書房、一九五八・六〇年、II、一四三頁。その他 W・シャイラー、P・ラウホなど。
- (5) スターリンは「社会主義の祖国」ソ連の利益のためあえて迎合してみせたのだとの弁護論は有り得ます。しかし、明らかなことは、権謀術数の末に守つたはずのソ連が消滅したとき、それを惜しむ人は僅かだったことです。権謀を駆使するほどに大義が失われる好例でしょう。
- (6) 一つだけ例外をつければ、のちに英國を代表する日本研究者の一人となるR・ストーリーは一九三七年夏、小樽高商の年若い英語教師として赴任するのに東京から民間航空機で札幌に飛びました。ドロシー・ストーリー『リチャード・ストーリー——日本人の心の友』、霞出版社、一九八七年、三六頁。